

## 地域情報（県別）

## 「患者の伴走者として死亡診断書を書くことが使命」－キャリア48年のベテラン医師・「西嶋医院」の西嶋公子院長に聞く ◆Vol.1

2019年5月8日（水）配信 m3.com地域版

東京都町田市にある「西嶋医院」の西嶋公子院長は、「患者の人生の伴走者」をめざして地域医療にまい進してきた。また、町田市に住む一人の住民として、住民参加型の町づくりにも尽力。ボランティアグループや地域ケア拠点の設立を主導し、2015年には「赤ひげ大賞」（日本医師会主催）を受賞した。医師になって、間もなく半世紀を迎えるベテラン医師の半生をたどった。（2019年2月23日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——医師になり48年が経ちます。先生が医学部に進んだ当時は今よりさらに女性の医師が少なかったと思うのですが、なぜ医師を志されたのでしょうか。

そうですね。私が進んだ東京医科歯科大学では当時、1学年に70人ほどの学生がいましたが、女性は私を含めて6人だけでした。先生方からは当然のように女性扱いはされませんでした。私の性格が元々さっぱりしているからか、医療の世界に身を置く中で特に女性だからどうこうと意識したことはありません。

医師を志したのは中学2年生の頃です。当時は白黒テレビが世に出て間もない頃で、流行りものが好きだった父が買って来て我が家にもありました。私が昼間、居間で一人テレビを見ている時に放映されていたのが「目がほしい」という名のドキュメンタリー番組。その番組にはタイトルの通り、目の見えない子どもたちが登場するわけですが、ある子が作った人形の顔の真ん中には大きな目がつけられていました。その子は切実に「目がほしい」と思っていたんですね。そんな場面を見て私は涙を流して感動し、「医者になろう。医者になって、こんな子たちを私が治してあげるんだ」と思ったのです。



西嶋公子院長

——大学を卒業してからはどんな風にキャリアを重ねていったのでしょうか。

子どもの頃は眼科医を志していましたが、曲折があって1970年の大学卒業後は小児科に進みました。東京医科歯科大学医学部附属病院で2年ほど研修を受けたわけですが、その時に医師としての転機となる、ある女の子と出会いました。白血病を患っていた9歳のその子は私を慕ってくれて、自分の悩みをよく聞かせてくれました。母子家庭でお母さんも仕事で忙しく、なかなか見舞いに来られないこと。寂しいこと。治療がづらいこと。個室で2人話し合い、タオルがぐっしょりと濡れるまで泣くその子を見守ることもありました。

その時に、子どもと言えども死に至る病をとて深刻に受け止めていることを肌身に感じたのです。そして、子どもも大人も区別なく、等しく死を前にする人への支え、つまりターミナルケアが必要なのだと感ずるようになりました。一方、病院という組織では面会時間や提供する食事などに制限があり、患者一人ひとりに合ったケアを行うのは難しいのではないかという思いも抱くようになりました。

——そうした思いが後々の開業や在宅医療の開始につながっていったのでしょうか。

振り返るとそうですね。全てが繋がっていたように思います。私はその子との出会いをきっかけに小児がんの患者を診たいと思ったのですが、当時の大学病院の小児科の教授の専門はホルモンでしたから、他院の国立小児病院（現：国立成育医療研究センター）に「無給でいいから」と談判して入れてもらい、5年間、小児がんの子どもたちを診療しました。しかしながら、受け持った100人のうち98人は亡くなりました。あの時ほど、医師としての無力感を覚えたことはなかったかもしれません。

開業したのは1979年です。私は両親の疎開先の富山県で生まれた後、2歳くらいの頃に東京の杉並区に戻り、以来、周辺を転々としてきました。町田市とは特にゆかりがなかったわけですが、医師になって結婚し、子どもができた後も両親と東林間（神奈川県相模原市）の2世帯マンションに住んでいました。両親は医師の仕事で忙しい私の子育てをよく手伝ってくれていて、そんな中でマンション住まいになかなか慣れなかった母が「やっぱり戸建てに住みたい」と言い出して。いい場所がないかと周辺を探していたところ、ちょうど町田市成瀬台が開発されていることを知ったのです。引っ越した後、程なくして戸建てを建て増して診療所を開きました。



町田市成瀬台にある同院

#### ——現在の診療体制や診療内容、開業医としてのテーマについてお聞かせください。

現在は私と非常勤医2人の計3人体制で診療をしていて、外来診療と在宅医療の両方を行っています。患者さんはクリニックの近くにお住まいの方が中心で、中には親、子、孫と3代にわたって通ってくれる方もいらっしゃいますね。レセプト枚数は月に500枚と少力で、そのうちの150枚ほどが在宅患者さんです。個人宅はほとんど私が回っていて、数としては70軒くらいでしょうか。施設への訪問は主に非常勤の先生が担当していて、町田市内にある3つのグループホームと2つの有料老人ホームを受け持っています。

私は医師として、患者さんの人生の伴走者でありたいと思っています。人生にはいいことも悪いこともあります。いろんなことがある中で、人生という道を歩いたり走ったりしている患者さんに手を差し伸べる。喉が渇いた時にお水を出してあげたり、汗をかいたときにタオルで拭いてあげたり、その時々で患者さんが必要なことを医師としてできることの中から選択し、手助けをすることが役割だと考えています。外来に通えなくなった患者さんも在宅医療を通して切れ目なく支える。「私が受け持つ患者さんの死亡診断書は私が書きたい。そうすることが使命だ」と思っています。

#### ◆西嶋公子（にしじま きみこ）氏

1945年富山県生まれ。1970年に東京医科歯科大学医学部を卒業後、東京医科歯科大学医学部附属病院や国立小児病院（現：国立成育医療研究センター）などに勤務し、1979年に「西嶋医院」を開業。「患者の人生の伴走者でありたい」と外来診療と在宅医療を行う傍ら、町田市に住む一人の住民として住民参加型の町づくりにも取り組む。ボランティアグループや地域ケア拠点「ケアセンター成瀬」の設立を主導し、2015年には「赤ひげ大賞」（日本医師会主催）を受賞した。

取材・文=医療ライター 庄部勇太

記事検索

ニュース・医療維新を検索

